

IV. 英語教育研究

目 次

- 1 はじめに
- 2 はじめたくなる Small Talk
- 3 リスニングの基礎指導
～子どもたちの「聞けた！わかった！」を大切に～
- 4 「伝え合う」って楽しいよ！
～コミュニケーション能力の育成と充実をめざして～
- 5 英語の歌のシラバス試案
- 6 小学校におけるパフォーマンス評価の実践
～新教科書「ONE WORLD Smiles」への活用～

1 はじめに

1 英語教育研究会について

新学習指導要領に小学校の外国語活動・外国語科が教科として明示され、小・中学校における外国語教育の授業づくりや連携のあり方が大きく変わることになった。そこで、英語教育研究会では、新学習指導要領に対応する授業実践について、関西大学外国語学部竹内理教授の指導助言のもとに研究に取り組んだ。

2 研究テーマ

全体テーマ：「新学習指導要領に対応する授業実践の研究～授業づくりから評価まで～」
各研究員の研究テーマは下記のとおりである。

兵頭 裕子	はじめたくなる Small Talk
堀切 あおい	リスニングの基礎指導 ～子どもたちの「聞けた！わかった！」を大切に～
遠藤 一翔	「伝え合う」って楽しいよ！ ～コミュニケーション能力の育成と充実をめざして～
北川 章子	英語の歌のシラバス試案
吉田 元樹	小学校におけるパフォーマンス評価の実践 ～新教科書「ONE WORLD Smiles」への活用～

3 活動概要

英語教育研究員連絡会

月に1回程度集まり、竹内教授の助言のもと研究を進めていった。

第1回：今年度の目標設定

第2回：研究のテーマの決定・共有と講師による指導助言

第3回：各研究員の研究テーマ及び進捗状況の報告

第4回：教育センターフォーラムリハーサル

第5回：教育センターフォーラムリハーサルと講師による指導助言

第6回：1年間のまとめ

教育センターフォーラム

令和2年2月19日（水）に開催された第7回茨木市教育センターフォーラムにおいて、4名の研究員が発表を行った。

2 はじめたくなる Small Talk

兵頭 裕子

1 はじめに

今年度、小中連携教科指導担当者として小学校英語に携わることとなった。英語の専科教諭ではなく、学級担任による英語の授業をサポートする立場である。1学期の始めは私がT1で担任がT2として授業を行い、GW明けからは担任がT1を行った。

4月当初から意識的に取り組んできた活動の一つが、新学習指導要領において小学校外国語科の授業で行うように記されている **Small Talk** である。5・6年生の授業の中で、できるだけ毎時間 **Small Talk** の活動を行ってきた。教員が話す英語を聞くことから児童同士が話す活動へとつながるように取り組んできたことを報告する。

2 取り組んだこと

取組みの報告にあたり、当初 **Small Talk** について私が誤解をしており、**Small Talk** だと思って取り組んでいた活動が、新学習指導要領における言語活動ではなく、あくまで言語活動の練習にあたることがわかった。2学期以降の言語活動としての **Small Talk** と区別するために※**Small Talk** として表現する。

(1) 大事にしたこと

話すこと・聞くことに慣れるように、できるだけ毎時間※**Small Talk** の活動を行った。※**Small Talk** の内容については、教科書で扱う文法事項に合った内容を用いて私が原稿を作成した。(図1参照) 原稿作成で気をつけた点は以下の通りである。

- ①既習語や表現を用いた短く簡単な英文を作成する。
- ②教科書に沿って各単元の文法や単語をできるだけ使用する。
- ③担任の教員や英語の教員の自分自身に関する本当の出来事や気持ちなどについてやり取りを行う。
- ④意味がわかれば「クスッ」と笑える要素やオチを用意する。

(2) **Small Talk** の活動

1学期は5・6年生ともに教員と教員の会話を聞かせて、会話後、児童に内容を確認する形で **Small Talk** の活動を行った。今年度はTTによる授業だったため、小学校の担任と私で行うことができ授業が進めやすかった。NETの日は、担任とNETや、NETと私、または3人で会話を行った。通常は担任だけの授業が多いと思うので、一人で自分のことについて語り、適宜児童に話しかけながら会話をすすめていく形になるかと思う。NETの日にはぜひ、児童に大人2人による英語のやり取りを見せて欲しい。

児童は比較的よく話の内容を聞き取れていた。一人ですべて聞き取れたり、理解できていなくても、途中まで答えて、続きを違う児童が答えたりする場面もあった。どの学校の児童も熱心に教員たちの会話を聞いている姿が印象的だった。これも会話の中に教員の本当の出来事や気持ちなどが入っているため、児童が関心を持って聞けた

からだと思う。意味がわかれば「クスッ」と笑える要素やオチを用意していたのも功を奏したかもしれない。回を重ねるごとに、少しずつ聞き取れることが増え、状況もよく理解できるようになった。担任からも児童たちが一生懸命聞き取ろうとしていると感想をもらった。

2学期からは児童同士での※Small Talkに取り組み始めた。5・6年生ともに教員と教員の会話を聞かせて、会話後、児童に内容を確認し、使う表現を練習してから会話する活動を行った。厳密に言うと、このような形での活動はあくまで Small Talk の練習にしかない。ただ、過渡期ということもあるので柔軟な運用とした。

3学期には6年生の授業の中で、で話題（テーマ）のみを与えてペアで会話をする Small Talk を実施した。児童は自分たちで既習語や既習表現を駆使して会話を続けようとしていた。会話の目標時間は1分～2分で設定した。モデルを見せたり、活動のふり返りを繰り返すことで、徐々に会話のつなげ方や話のふくらまし方に慣れる児童が増えた。回を重ねるごとに児童たちも何の活動なのかがよくわかり、意欲的に取り組んでいたと思う。

Small Talk の活動で円滑なコミュニケーションを行い、会話をつなげるために以下の点について児童に指導した。

- ・笑顔 “smile”
- ・視線を合わせる “eye contact”
- ・はっきりした声 “clear voice”
- ・反応 “reaction”

特に反応 “reaction” については、会話をつなげる上で非常に有効である。児童にぜひ意識的に使わせたい。相手が話したり、答えた際に、黙って聞くのではなく感情を表す単語を言わせるようにした。(Nice! / Good! / Great! / Oh! / Ah-ha. / Wow! / I see. など)できるだけ簡単に、短い単語を教えた。また、相手が話した言葉をそのまま繰り返すだけでも十分な反応 “reaction” になるので、ぜひ児童に学ばせたい。褒め言葉については会話中だけでなく、普段の授業中にも使えるように掲示物を作成し、随時確認できるようにした。さらに円滑なコミュニケーションを行うためや会話をつなげるための表現についても、実演の中で取り入れて児童にも使用を促した。(Hello. / Thank you. / Good bye. / How about you? / One more, please. / Why? / Me too. など) これらの中でも、理由をたずねる“ Why?”は会話がつながり、児童が思考する場面が生まれるのでおすすめである。理由についてはできるだけ既習表現を使い、多少文法が完璧でなくても意味が通じる言い方を使わせた。それでも難しい場合は日本語でもよいこととした。

(一例)

A: What do you want to be?

B: I want to be a soccer player.

A: Why?

B: I like soccer. (I like ○○○[サッカー選手の名前] / I'm good at playing soccer.)

A: I see.

3 成果と課題

新学習指導要領では5年生は指導者の話を聞くことを中心に、6年生はペアで伝え合うことを中心に、**Small Talk** を行うこととしている。今年度は過渡期であるため、1学期中は5年生も6年生も指導者の話を聞くことを※**Small Talk** の活動の中心とした。2学期は教員と教員の会話を聞くだけでなく、児童と児童の会話を成り立たせることをめざし、まずは教員が児童に話す場面を増やすことで、児童と児童が会話をする機会を**Small Talk** の活動の中心とすることにした。

社会は急速な国際化が進んではいるが、日本における日常生活の中で、児童が英語で会話をしなければならない場面や、英語での会話に触れる機会はまだまだ少ない。たくさんの英語に親しみ、実際に使用する場面をいかに多く作り出すかが大切となる。その点において、**Small Talk** の練習及び活動は大変効果的である。

しかし、**Small Talk** をいきなり児童同士で行わせるのは不可能である。まずはたくさん聞かせることが必要であり、そのためにも3・4年生での外国語活動を通じて、十分英語に慣れ親しんでおく必要がある。そして外国語科となる5年生の**Small Talk** で様々な場面での会話の仕方を英語でのやり取りを通じて体験的に学び、6年生でやっと場面や状況に応じて既習語や既習表現を自分で考えて使いながら、児童同士が英語で会話できるようになる。一朝一夕にできることではないが、スモールステップを積み重ねることで、可能となる。

5年生の授業の中で、**Small Talk** の練習として、基本文の一部を自分のことに変えて児童同士の会話練習を行なった。児童の感想は「英語で会話することは思ったよりも難しいが、友だちと英語で会話することがとても楽しい、もっと上手に英語で話せるようになりたい」など、前向きな意見が多くみられた。児童に、英語を使って相手に通じた、英語を聞いて意味がなんとなくわかった、という体験をたくさんさせて欲しい。日本語ではなく、英語を使うことで、普段の生活では話さない相手とも会話することができる。仲良しだけではなく、様々な相手とコミュニケーションをとることは、これからの国際社会で大変重要なスキルの一つである。クラスの中で、誰とでも話すことができる集団づくりにもつなげることができる。児童が自分の考えや気持ちをお互いに伝え合う場面を英語の授業で作っていききたい。

Small Talk を行うためには日々の授業での練習が必須である。そして同じ話題について複数回ペアを変えて話すなど、繰り返し取り組んで慣れることも重要である。单元ごとに小学校の担任が英語でオリジナルの台本を作成するのは、担任の負担が大きいと思う。教科書に付属している会話文をそのまま使ってもよいと思うが、担任の本当の出来事や気持ちが入っている方が児童にとってはより効果的である。ベースの部分は教科書などの会話例文をそのまま利用し、一部分だけでも事実を取り入れることがいいのではないだろうか。手間ではあるが、そのひと手間をかけることが、教科書の他人事の会話が自分や身近な人の現実の会話へと変わり、児童が主体的に英語を使って会話していくことにつながるだろう。まずは、**Small Talk** へつながる練習からはじめてみませんか。

<p>A: When is your birthday? B: My birthday is December 25th. A: Oh, Christmas!! That's good. You can get 2 presents! B: Not so good. My mother's birthday is December 15th and my friends' birthdays are December 20th and 27th. I have 4 birthday parties in December. Oh my god!! No money!! A: That's too bad. (We Can! 1 U2 When is your birthday?)</p>	<p>5年 UNIT1 How do you spell it? T: Hello, everyone. My name is Takeshi. T-a-k-e-s-h-i. Takeshi. Nice to meet you. I'm from Takayama. I like pizza. Pizza is delicious. But I don't like sweets. I don't like candy. I don't like chocolate. How about you? What food do you like? S1: I like sweets. I like chocolate very much. T: Oh, you like chocolate? How about colors? I like blue. What color do you like? S2: I like blue. T: Oh, the same.</p>	<p>6年 UNIT5 My Summer Vacation S1: What food do you like in summer? S2: I like watermelon. S1: Me, too. Why? S2: It's sweet. How about you?</p>
--	---	---

(図 1)

Small Talk 例 (小学校英語外国語活動・外国語研修ガイドブックより)

付録として、今年度 We can! に取り組んできた経験から、来年度から茨木市で採用される小学校外国語科の教科書の単元別におすすめの話題一覧を作成した。ぜひ参考にしたい。

ONE WORLD Smiles 5 教育出版

おすすめ話題

単元名

5年 Lesson 1 A: I'm (Saki). How do you spell it?
B: My name is(Kosei). - K-o-s-e-i.

Nice to meet you.

5年 Lesson 2

A: When is your birthday?

B: My birthday is August 19th.

When is your birthday?

5年 Lesson 3.

A: What subject do you like?

B: I like English.

I have P.E. on Monday.

A: Why?

B: I like Disney.

5年 Lesson 4.

A: What time do you get up?

B: I get up at six.

This is my dream day.

5年 Lesson 5.

A: What can you do?

B: I can cook.

A: Great! What cooking?

B: I can cook curry. Do you like curry?

A: Yes, I do.

5年 Lesson 6.

A: Where do you want to go?

B: I want to go to Tokyo.

A: Why?

B: I want to see the sky tree.

A: Where is my eraser?

B: It's in the pen case.

5年 Lesson 8.

Where is the station?

5年 Lesson 7

A: What would you like?

B: I'd like pizza.

5年 Lesson 9.

A: Who is your hero?

B: My hero is Mickey Mouse.

A: Why?

B: He can dance well.

ONE WORLD Smiles 6

6年 Lesson 1.

Let's be friends.

A: What sports do you like?

B: I like tennis. How about you?

6年 Lesson 3

A: What is your favorite convenience store?

Welcome to Japan.

B: Family Mart..

A: Why?

B: I like famichiki.

A: Me too.

6年 Lesson 4

★ A: What did you eat last night?

B: I ate sukiyaki.

My Summer Vacation.

★

A: Where did you go yesterday?

B: I went to the park.

A: Why?

B: I like the park.

6年 Lesson 5

A: What country do you want to visit?

B: I want to visit the USA.

A: Why?

B: I want to go to the Disney Land.

6年 Lesson 6

A: What sports do you want to try?

B: I want to try Boccia.

A: Boccia?

B: Yes. It is a Paralympics sport.

Olympics and Paralympics

6年 Lesson 7

A: What's your best memory?

B: My best memory is school trip.

A: Why?

B: I ate Hiroshimayaki. It was delicious.

My Best Memory

6年 Lesson 8

A: What do you want to be?

B: I want to be a teacher.

A: What teacher?

B: English teacher.

A: What club do you want to join?

B: I want to join the soccer club.

6年 Lesson 9

Junior High School Life

Small Talk は既習語・既習表現を単元終了後にも、繰り返し使用する機会をすることで、定着をはかるための言語活動である。話題は各単元の基本表現を使った会話でいいと思う。中には、既習後、繰り返し使える便利な話題もある。☆マークは無限で使える話題。

参考文献

小学校英語外国語活動・外国語研修ガイドブック(文部科学省)

3 リスニングの基礎指導

～子どもたちの「聞けた！わかった！」を大切に～

堀切 あおい

1 はじめに

子どもたちと外国語活動を進めるうえで、リスニングの指導に悩んでいた。聞き取れないと、子どもは授業からフェードアウトしてしまいがちになる。逆に、聴き取れた・わかったと感じることができれば、子どもたちは意欲的に取り組むようになると考え、子どもたちが前向きにリスニングの学習に取り組むためにどのように指導をしていけばいいのかを研究した。

2 外国語で大切な「聴く」

(1) インプットとして重要なリスニング

言語習得ではたくさんの「インプット」が大切である。そのインプットの手段の多くは「聴く」である。外国語活動の中では「リスニング」の学習活動にあたる。ただ、聴くだけの活動はほとんどなく、聴いて書く・聴いて動く・聴いて考える・聴いて話す、というように、聴くことは様々な活動につながる。「聴く」ことは言語習得の上で非常に重要だと言える。

(2) 小学生の外国語活動における「聴く」の特徴

小学生の英語リスニングの種類は大きく分けて精聴（文法や語彙を細かく聞き取る）と多聴（多様な英語をたくさん聞き、大まかに理解する）の二つに分かれる。外国語学習の初期段階である小学生の英語では、たくさん聴いて大まかに理解するという多聴が大切である。ただし、教科書のリスニング教材の問題を解くうえで精聴の要素も必要であるため、小学校のリスニングは多聴の要素の中に少し精聴が入っているイメージである。

3 リスニング指導で大切なこと

(1) 聴く前の指導

リスニング内容のテーマを事前に伝える、出てくる語彙を事前に予測させるなどして聴く準備をする。事前準備なく聴くよりも単語を捉えやすくなる。また、たくさん出てくる言葉の中で何を聴けばいいのかを明確に提示することで、リスニングが苦手な子の不安を取り除き、関心を高める。さらに、限られた時間内で学習を進めていくので、聴く目的を明確化することで時間短縮にもつながる。

(2) 聴く回数

目的やリスニング教材の難易度、文章量で大きく変わるが、目安を持っておくとよい。概要や要点だけを把握させたい場合、2～3回、もう少し細部まで聞かせたい場合は4～5回ほどである。ただし、子どもたちがどれくらい聴き取って理解しているかが大切であり、その理解度に合わせる必要がある。子どもたちがどの程度聴き取れたか把握し、何回聴かせるか臨機応変に対応する。聴いたことを書かせる場合にはど

れくらい書けているかを机間指導で見たり、もう一度聴きたいかどうか手を上げさせて意思表示させたりする。子どもたちが聴き取れていなくて再度聴かせる際は、聴き取らせたい言葉がいつごろ出てくるのかを教える・前後の文章や表現を教えるなど、ヒントを出して子どもたちの集中が続くようにして聴かせる。

4 聴かせ方

授業者が教材の文章を繰り返したり、ポーズを入れて聴きやすいようにする。英語でのリスニングで大事なことはスピードを落とすことではなく、区切りをつけて聴かせることである。スピードを落としても単語や文章のまとまりがわからなければ聴き取ることは難しい。

5 レベルアップ

子どもたちがリスニングに慣れてきたら、少しずつレベルを上げてよい。ヒントを少なくする、最初からヒントなしで聴いてみるなど、子どもたちの様子を見ながら進めていく。ただし、聴き取れなかったらヒントを出すなど、必ずフォローが必要である。また、リピーティング（1文ずつ聴かせてとめて、聴き取った文章を言う）でチャンツのように聴いたことをすぐに言葉にする練習もよい。

6 動画付きのリスニング教材

教科書にある“Watch and think”のように、動画教材がある。これは、言葉の意味や会話内容を予測する機会を、聴くだけの教材より多く子どもたちに与えることができる。映像からのヒントが少ない教材は普段のリスニングと同じ要領で行えばよい。やり取りの様子や言葉の意味が視覚的にわかりやすい教材は、音声なしで聞かせてみたり、ヒントなしで見させたりと子どもたちに考えさせるようにする。おおまかな内容をつかんでから、初めて出てきた言葉や表現を確認する。

7 実践例

筆箱の中身が誰のものか当てる教材のリスニングで、子どもたちと筆箱の中身を確認してからリスニングを行った。子どもたちはどの筆箱のことかはすぐに聴きとれたが、人物名を聴き取ることができなかった。「ロバートがラビットに聞こえる」「さよって人の名前？」など、予想以上に困った様子だった。この教材ではどの筆箱かを聴きとらせなかったもので、出てくる人物名を事前に伝えて選択できるようにすれば、自分で聴きとって選んで答えを書けるので、子どもたちのできた・わかった感があったと思う。

7 成果と課題

聴く目的を明確にしたり、ヒントを出したりすることで、英語に苦手意識がある児童も前向きに取り組む姿が多く見られるようになった。また、同じ教材を何度も聴かせても集中が続くようになり、リスニングの後の質問に対する答えも反応がよくなってきた。

子どもたちの理解度を見ながら臨機応変にヒントや質問を変えていくのは難しく、教員も経験を積み重ねる必要があると感じた。

4 「伝え合う」って楽しいよ！

～コミュニケーション能力の育成と充実をめざして～

遠藤 一翔

1 はじめに

今年度、3年生を担当し、子どもたちと共に外国語活動の学習を進めてきた。児童は外国語活動の授業を楽しみにしており、授業の参加が楽しいと答える児童が多い。しかし、児童のアンケートを見ると、そのおおくがビンゴやミニゲームなどの活動に対し楽しさを感じており、人とのやりとり、「伝え合う」ことに対して楽しさを感じるといった記述が見当たらなかった。そこで、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力の育成のために、授業で「伝え合う楽しさ」を実感できる取組みを考え、実践を行った。そこから見えた課題、成果を報告する。

2 伝え合う楽しさを実感できる授業をめざして実践したこと

(1) 場面設定の工夫

必然性のある場面の設定、インフォメーションギャップのある場面を考え、授業を構成した。学年、時には部会の中でアイデアを募り主体的に取り組める場面設定について考えた。

さらに、クラスの友だちの意外な一面がわかったり、友だち同士がつながれる場面設定はないか模索し、そのことが、人とかかわる楽しさを感じることに繋がると考え、授業を行った。

【Let's Try 1 での実践例】

Unit 4 「友だちの好き嫌いから、サラダを作ろう！」

Unit 5 「友だちにインタビューをし、友だちクイズをつくろう！」

Unit 7 「友だちにインタビューをし、クリスマスカードをおくろう！」

(2) 単元のゴールを明確にし、最初に伝える

単元のゴールを第一時で児童に伝え、授業を進めた。今行っているミニゲームやビンゴが何に結びつくのか、児童に単語や表現の練習をする必然性を気づかせることで、目的意識をもって活動に取り組めると考え、実践した。

(3) NETとの連携

やりとりの見本を見せる際には、NETの協力により作成した動画を使用した。自分たちが練習するやりとりを使えば、友だちだけでなく、外国の人ともコミュニケーションがとれるんだという意識が芽生え、人とかかわる楽しさにつながると考え、実践した。

(4) 相手に伝わる答え方、伝え方

言語だけで相手に自分の意志を伝えるのではなく、その他の表現もコミュニケーション

ョンには大きな役割があることを意識させ、指導した。やりとりの例の動画を見せ、相手にわかりやすくやりとりするには何が必要か考えさせ、声の大きさ、アイコンタクト、表情、ジェスチャー等も、コミュニケーションにおいて大きな役割を果たしていることに気づかせ、授業の中で積極的に使っていけるよう指導した。

また、相づちは、単元ごとにふさわしいもの考えた。話型をそのまま答えさせるのではなく、場面設定の状況によって、自分の好みや考えと比較しながら相づちをうつことを意識させた。例えば、同じ考えなら“me too”、意外な反応が返ってきたら“wow”“really?”“unbelievable!”のように、相手の答えから、自分で表現を選んで伝えることを意識させ、相手を意識してコミュニケーションを図るような手立てに取り組んだ。

3 取組みの様子

Unit 4 「I like blue.」での実践例を報告する。ここでは、児童にとって身近な「給食」をテーマに授業を行った。まず、単元のゴールを児童に掲示した。単元のゴールから、外国語を使う必然性を児童に考えさせ、「好き嫌いを聞くには、どう言えばいいんだろう？」という疑問に出会わせるところから、授業を進めた。実際に相手にインタビューをする場面では、自分の好き嫌いと照らし合わせながら、“me too” “really?”

“unbelievable!”と相づちを打ち、ジェスチャー等言語以外の要素も用いながら、積極的にコミュニケーションを楽しんでいた。

やりとりをした後、聞き取った情報をもとに、サラダづくりをした。どんな思いでサラダを作ったのか、相手に一言を添えて、作ったサラダを交換した。児童の振り返りから、「英語でしゃべったり、自分のことをおしえたりするのが楽しかった!」「友達のいろんなことを知って面白かった!」など、お互いのことを伝え合う中から「楽しかった」「面白かった」等の感想を書いた児童が多かった。

4 成果と課題

成果として、友だち、人とかかわりたくなる授業の場面設定、手立てをしっかりと用意し実践することは、外国語を使って人と積極的にかかわろうとする態度につながり、児童が伝え合う楽しさを実感できることがわかった。また、コミュニケーション能力の向上は、クラスの集団づくりにもつながり、学級経営にも生かせると感じた。

課題としては、場面設定や状況設定のより一層の研究が挙げられる。学年や部会などの中でアイデアを出し合い、児童がどんどんやってみたくなる場面設定を今後も模索していくことが必要である。また、来年度から、新学習指導要領も始まり、慣れない中での教材研究が予想されるので、自分がやってみてよかった取組みや、取り組んでみて感じた改善点などを教職員間で共有していくことが大切だと感じた。



5 英語の歌のシラバス試案

北川 章子

1 はじめに

中学校および小学校の授業で、英語の歌を活用している。今年度は中学1年生、小学校6・5・4年生の4つの学年の授業にかかわっている中で、各学齢に合った歌を取り上げ体系化できないかと考えた。学年で重複したり、かならずしも扱う単元に一致したものではなくとも、英語の歌を授業で扱うことはさまざまな学習効果が期待できる。今まで取り上げたものや今後取り上げたいものも含めて、リスト化し効率的に活用したいと取り組んだ実践について、現時点での成果を報告する。

2 英語の歌を授業に取り入れるメリット

メロディーに乗せて英語の音を聞き、歌うことでさまざまな効果が期待できる。

(1) 発音

メロディーに乗せて音を聞くことで、英語の発音に慣れ親しむことができる。授業では小学校であっても中学校であっても、カタカナ書きの発音表記はせずに、実際の音を聞かせるようにしている。歌を歌わせる場合は「(正確でなくてもいいので)音をよく聞いて、思い切って声を出してごらん」と指導し、授業者自らがまず声を出すようにしている。リピートで発音させる場合も、自信のない子どものために、授業者がこまめに声を出し模倣させることで、子どもが安心して発音できるように心がけている。

(2) 心の解放

歌を歌う、声を出すということは、自分自身を表現することの第一歩だと考えている。集団の中で英語を話す体験をすることは、子どもによってはとても勇気がいることである。しかし、心地よい旋律に合わせて無理なく声を出す環境づくりをすることで、気持ちがほぐれ英語の環境になじむことができる。子どもの中には、英語の歌を歌う活動が、自分のことを話すきっかけになるものもいた。子どもに「英語の授業では、自分の声を出しても大丈夫なのだ」と思わせることができ、積極的な授業参加を促すことができる。

(3) フォニックスの学習

授業で歌を取り上げる場合は、英語の歌詞を必ず配布物やパワーポイントで示すようにしている。たとえ英単語が読めない小学生であったとしても、文字を確認できる環境さえ用意すれば、歌を通して文字と音のつながりを学ぶことができる。フォニックス学習には継続的な習熟が必要であり、英語の歌で多面的にフォニックス学習の効果が得られると考えている。

(4) 英語授業の雰囲気づくりができる

以前、中学校のカリキュラムに選択科目があったとき、「英語で歌おう」というタイトルの授業を担当したことがあった。その際にたまたま音楽好きな生徒が集中することがあり、歌を練習し、ミニコンサートを開くなど、とても楽しい授業をつくることができた。歌唱指導をせず単に音楽を再生するだけでも、一度習った英語の歌をB

GMとして使用することで英語に慣れ親しませたり、「音楽が鳴り終われば終了」と指示し、アクティビティ時のタイマーとして使用するなどの活用ができる。生徒に急いで素早く活動することを促したいときは、アップテンポの曲を用意して演出すれば、生徒も乗りやすくなる。音楽の力を借りて、楽しい時間を演出でき、学習の積極的な効果が得られる。

(5) 繰り返し学習

英語の歌の活動によって、単純な反復練習を楽しく行うことができる。歌唱指導の際、最初は歌詞の朗読、次に伴奏なしのリピート、最後にメロディーつきの斉唱、さらにはカラオケ音声を使って自立的に歌う等、少なくとも簡単に4パターンの繰り返しが可能である。

(6) 学習モチベーション向上

楽しい雰囲気、自分が安心して声が出せる授業環境があれば、英語歌唱の授業でなくとも学習の時間全体を積極的なものとしてとらえることができる。

3 シラバス試案～歌リスト～

中学校では主に文法とターゲットとなる言語材料に連動した歌を、小学校では TPR (Total physical Response) も意識して、英語に慣れ親しむことを目的とした歌を取り上げるようにしている。学年によってははっきりと使用する歌が分割されるわけではないが、できるだけ学齢と学習効果に見合った英語の歌・テーマを取り上げている。

(1) 中学校

① 中学校 1 年

タイトル	アーティスト	文法や学習事項	備考(使用目的や活用法など)
Thunder	Imagine Dragons	th 音のフォニックス	
This is Me	Keala Settle	サビ部 This is ~.	
Fight Song	Rachel Platten	This is ~.	
Firework	Katy Perry	You are ~.	
What Do You Mean?	Justin Bieber		
Story of My Life	One Direction	人称代名詞	穴埋め聞き取り
These Days	Rudimental	サビ部 these ~	
The Fox	Ylvis	サビ部 does の疑問文	
Friends	Justin Bieber	サビ部 be の印象付け	
Love on Top	Beyonce	can 疑問文	
Can't Stop the Feeling	Justin Timberlake	サビ部 can't	
Runnin'	Naughty Boy	全曲通し現在進行形	
Do They Know It's Christmas?	Band Aid	季節テーマ	国際理解・チャリティ精神理解
Luka	Suzanne Vega		社会問題理解

②中学校 2年

タイトル	アーティスト	文法や学習事項	備考(使用目的 や活用法など)
タイトル	アーティスト	文法や学習事項	備考
Titanium	David Guetta (feat. Sia)	サビ部 won't	
We Will Rock You	Queen	サビ部 will	
Born to Love You	Queen	to 不定詞 副詞的用法	
Bicycle Race	Queen	to 不定詞 名詞的用法	
Last Christmas	Wham!	SVOO と SVO to O	季節テーマ

(2) 小学校

①小学校 6年

タイトル	アーティスト	文法や学習事項	備考(使用目的 や活用法など)
Do Re Mi			
Edelweiss			
Sakura Sakura		日本文化紹介	
Do You Know the Astronaut?		将来の夢	
Ten Little Witches		数 1~10、ハロウィン	季節テーマ
We Wish You a Merry Christmas		クリスマス	季節テーマ
Give Me Wings			英語版「翼を下 さい」
I've Been Working on the Railroad			「線路は続くよ どこまでも」原 曲
The Old man's Clock			「大きなのっぽ の古時計」原曲
My Bonnie			
Take Me Out to the Ball Game		スポーツ文化	

②小学校 5年

タイトル	アーティスト	文法や学習事項	備考(使用目的 や活用法など)
Twelve Months			
7 Days of a Week			

Ten Little Witches		数 1~10、ハロウィン	季節テーマ
The Bus Song			
Santa Clause is Coming to Town		クリスマス	季節テーマ
Row Row Row Your Boat			輪唱の楽しさ
Five Little Monkeys		1~5 の数字	歌詞のユーモア

③小学校 4 年

タイトル	アーティスト	文法や学習事項	備考(使用目的や活用法など)
Head, Shoulders, Knees and Toes		体の部分	
I'm a Little Teapot			
We Wish You a Merry Christmas			季節テーマ
Are You Hungry?		食べ物・料理	

4 まとめ

自分が中学生のころ、英語の歌を聞くようになったことをきっかけに、国際交流のボランティア活動等、英語の歌が人と人をつなぐ効果があることを知った。英語の授業も、子ども達が英語という新しい世界と自分自身をつなぐきっかけになると考えている。子ども達が英語の授業を楽しんでいると感じられる英語の歌の活動を、今後も探求していきたい。

6 小学校におけるパフォーマンス評価の実践

～新教科書「ONE WORLD Smiles」への活用～

吉田 元樹

1 研究の目的

小学校におけるパフォーマンス評価の必要性を考え、We Can!を用いた授業を行うなかで、ルーブリック（判断基準）の作成に取り組んだ。授業者による授業改善、学習者による学習改善という視点から、記録のための評価に至るまでに、指導のための評価をどのように実践していくのかを指導方法から探っていくことを研究の目的とした。

2 研究の方法

評価の領域を、話すこと〔やり取り〕及び話すこと〔発表〕の2つの領域、評価の観点を思考・判断・表現（目的・場面・状況への対応）に絞り、次のようにパフォーマンステストを行った。

実施時期	学習目標
6年生1学期	目的地への行き方をうまく伝えよう。〔やり取り〕
6年生2学期	町のおすすめの場所をしょうかいしよう。〔発表〕
5年生2学期	できること・できないことを伝えよう。〔発表〕
5年生3学期	目的地への行き方をうまく伝えよう。〔やり取り〕

先行した6年生の授業実践を分析し、5年生の同じ領域のパフォーマンス課題へ向け、授業改善に取り組み、指導方法を見出した。

3 研究の内容

4つの各単元の中で（1）～（5）の場面を設けることにより、児童の学習を促す指導を実践した。

（1）ルーブリックの提示

単元を通して、どのようなことができるようになるのかを提示する。

① 〔やり取り〕

A：正確に行き方をたずねたり、案内したりするやり取りができる。

B：行き方をたずねたり、案内したりするやり取りができる。

C：友達と一緒に行き方をたずねたり、案内したりするやり取りができる。

② 〔発表〕

A：発表シートをもとに、わかりやすい言葉で堂々と紹介（発表）することができる。

B：発表シートをもとに、紹介（発表）することができる。

C：発表シートを見ながら、紹介（発表）することができる。

（2）デモンストレーション

映像や授業者のモデルにより、判断基準（おおむね満足する）を具体化する。単元が進むにつれ、表現や言葉を知って十分に言うことができる状態になってから、デモ

ンストレーションに取り組むと効果的である。「授業者とNET」→「授業者と子ども」→「子ども同士」の順で行うと、子ども達は安心して活動を進められる。

(3) 相互評価

判断基準に基づいて、グループやペアでやり取りを見合う。〔発表〕に関しては、ルーブリックの要素として、声（大きさ、間・速度）、態度（表情・目線、暗唱）、内容（わかりやすさ）について、さらに細かくABCを提示した。相互評価は経験を積むほど、正確に友達を評価することができるようになる。

(4) プレ活動

パフォーマンス課題につながるアクティビティを行う。ほぼ本番に近い形で行うが、ルーブリックに沿った形で進められない場合（日本語を使ってしまうなど）や価値付ける必要のある表現があった場合（既習の表現を積極的に使っているなど）は、その都度活動を中断させて指導したり褒めたりする。

(5) パフォーマンス課題

授業者やNETとやり取りをすることが本来必要であるが、子ども同士でやり取りをしているところを評価することもできる。限られた時間の中で、学級全員を評価することは難しいため、複数の評価者で行うか、複数回に分けて行うなどの工夫が必要である。複数の評価者で行う場合には、評価者同士が十分にルーブリックを共有しておく必要がある。

4 結果

ルーブリックを示すことによって、子ども達のふり返りには、「次は〇〇ができるようになりたい。」「今日は〇〇がうまくいかなかった。」というものが多く見られるようになった。また、「〇〇さんのこういう所がよかったから、真似をしたい。」など、相手のよさから学んだり、相手のよさの理由について考えたりする子どもの姿も見られた。特に、〔発表〕に関わるルーブリックの要素は、子どもたちのふり返りを分析する中で、伝わるスピーチにするために大切な事柄であることがわかった。

5 考察

子ども達の学習態度や技能をより客観的に評価でき、子どもが学習目標への到達状況（できたこと・できなかったこと）を把握できるようにすることがルーブリックを作成する意義である。また、学習目標が明確になることで学習意欲の向上につながる。さらに、単元の終末に子どもたちが取り組んでみたくなるパフォーマンス課題の設定が非常に重要である。

新しい教科書 ONE WORLD Smiles のパフォーマンス課題は、We Can! とほぼ同様のものであるが、さらなる授業改善を行い、これまで積み重ねてきた教材研究と子ども達が積み上げてきた学習を今以上に組み合わせ、学習成果と子どもたちの学習意欲を高めるよう取り組んでいきたい。